

時代小説の楽しみ

別巻



時代小説

十二人のヒーロー

新潮社



時代小説の楽しみ

別巻

時代小説・十二人のヒーロー

新潮社



時代小説・十二人のヒーロー
時代小説の楽しみ別巻



編者 縄田一男

印刷 一九九〇年二月二〇日

発行 一九九〇年二月二五日

発行者 佐藤亮一

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(266)五一一 編集〇三(266)五四一一

振替 東京四一八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社 製本所 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

© Kazuo Nawata & SHINCHOSHA 1990, Printed in Japan

ISBN4-10-602813-1 C0393

目次

半七〔半七捕物帳・お文の魂〕	岡本綺堂	7
むつつり右門〔右門捕物帖・南蛮幽霊〕	佐々木味津三	37
銭形平次〔銭形平次捕物控・金色の処女〕	野村胡堂	67
人形佐七〔人形佐七捕物帳・羽子板娘〕	横溝正史	95
若さま侍〔若さま侍捕物手帖・舞扇の謎〕	城昌幸	123
机竜之助〔大菩薩峠〕	中里介山	151
丹下左膳〔新版大岡政談〕	林不忘	197

森尾重四郎〔砂絵呪縛〕

土師清二 223

眠狂四郎〔悪女仇討〕

柴田錬三郎 253

鞍馬天狗〔鬼面の老女〕

大佛次郎 279

早乙女主水之介〔旗本退屈男〕

佐々木味津三 323

民谷伊右衛門〔新釈四谷怪談〕

直木三十五 357

編者解説

縄田一男 385

装画・赤坂三好

時代小説・十二人のヒーロー

時代小説の楽しみ別巻

半七〔半七捕物帳・お文の魂〕

岡本綺堂

岡本綺堂（おかもと・きどう）

明治五（一八七二）年、東京・芝高輪生れ。府立一中を卒業後、明治二十三年、東京日日新聞の記者となり、劇評に健筆をふるう。川上音二郎の依頼で書いた戯曲『維新前後』を機縁に、『修禪寺物語』『鳥辺山心中』『番町皿屋敷』など多くの史劇を遺す。徳川期に關する深い学殖を生かした『半七捕物帳』『三浦老人昔話』などの読物約一〇〇篇は、現代までも読みつがれている。昭和十四年没。『岡本綺堂読物選集』全八卷（昭和四十四年、青蛙房）がある。

わたしの叔父は江戸の末期に生れたので、その時代に最も多く行われた化物屋敷の不入の間や、嫉み深い女の生霊や、執念深い男の死霊や、そうしたたぐいの陰惨な幽怪な伝説を沢山に知っていた。しかも叔父は「武士たるものが妖怪などを信ずべきものでない。」という武士的教育の感化から、一切これを否認しようと努めていたらしい。その気風は明治以後になっても失せなかった。わたし達が子供のときに何か取り留めのない化物話などを始めると、叔父はいつでも苦い顔をして碌々相手にもなつて呉れなかった。

その叔父が唯一度こんなことを云つた。

「併し世の中には解らないことがある。あのおふみの一件などは……。」

おふみの一件が何であるかは誰も知らなかった。叔父も自己の主張を裏切るような、この不可解の事実を発表するのが如何にも残念であつたらしく、その以上には何も秘密を洩らさなかった。父に訊いても話してくれなかった。併しその事件の蔭にはKのおじさんが潜んでいるらしいことは、叔父の口ぶりに因つてぼぼ想像されたので、わたしの稚い好奇心は到頭わたしを促してKのおじさんのところへ奔らせた。私はその時まだ十二であつた。Kのおじさんは、肉縁の叔父ではない。父が明治以前から交際しているの、わたしは稚い時から此人をおじさんと呼び慣わしていたのである。

わたしの質問に対して、Kのおじさんも満足な返答をあたえて呉れなかった。

「まあ、そんなことはどうでも可い。つまらない化物の話なんぞすると、お父さんや叔父さんに叱られる。」

ふだんから話好きのおじさんも、この問題については堅く口を結んでいるので、わたしも押返して詮索する手がかりが無かった。学校で毎日のように物理学や数学をどしどし詰め込まれるのに忙しい私の頭からは、おふみと云う女の名も次第に煙のように消えてしまった。それから二年ほど経って、なんでも十一月の末であったと記憶している。わたしが学校から帰る頃から寒い雨がそぼそぼと降り出して、日が暮れる頃には可なりに強い降りになった。Kのおばさんは近所の人に誘われて、きようは午前ひるまえから新富座見物に出かけた筈である。

「わたしは留守番だから、あしたの晩は遊びにおいでよ。」と前の日にKのおじさんが云った。わたしはその約束を守って、夕飯を済ますとすぐにKのおじさんをたずねた。Kの家はわたしの家から直径にして四町ほどしか距はなれていなかったが、場所は番町で、その頃には江戸時代の形見という武家屋敷の古い建物がまだ取払われずに残っていて、晴れた日にも何だか陰ったような薄暗い町の影を作っていた。雨のゆうぐれは殊に怪あやしかった。Kのおじさんも或大名屋敷の門内に住んでいたが、おそらく其の昔は家老とか用人とかいう身分の人の住居であつたらう。兎も角も一軒建てになつていて、小さい庭には粗あらい竹垣が結いまわしてあつた。

Kのおじさんは役所から帰って、もう夕飯をしまつて、湯から帰っていた。おじさんは私を相手にしてランプの前で一時間ほど他愛もない話などをしていた。時々雨戸を撫でる庭の八つ手の大きい葉に、雨の音がびしゃびしゃときこえるのも、外の暗さを想わせるような夜であつた。柱にかけてある時計が七時を打つと、おじさんはふと話をやめて外の雨に耳を傾けた。

「大分降って来たな。」

「おばさんは帰りに困るでしょう。」

「なに、人力車を迎いにやったから可い。」

こう云っておじさんは又黙って茶を喫んでいたが、やがて少し真面目になった。

「おい、いつかお前が訊いたおふみの話を今夜聞かしてやろうか。化物の話はこういう晩が可いもんだ。しかしお前は臆病だからなあ。」

實際わたしは臆病であつた。それでも怖い物見たさ聞きたさに、いつも小さい身体を固くして一生懸命に怪談を聞くのが好きであつた。殊に年来の疑問になつて居るおふみの一件を測らずもおじさんの方から切り出したので、わたしは思わず眼をかがやかした。明るいうランプの下ならどんな怪談でも怖くないという風に、わざと肩を聳かしておじさんの顔を屹とみあげると、強いて勇気を糺らうような私の子供らしい態度が、おじさんの眼にはおかしく見えたらしい。彼はしばらく黙つてにやにや笑つていた。

「そんなら話して聞かせるが、怖くつて家へ帰られなくなったから、今夜は泊めて呉れなんて云うなよ。」

先ずこう嚇して置いて、おじさんはおふみの一件というのをしずかに話し出した。

「わたしが丁度二十歳の時だから、元治元年——京都では蛤御門の戦があつた年のことだと思え。」と、おじさんは先ず官頭を置いた。

その頃この番町に松村彦太郎という三百石の旗本が屋敷を持つていた。松村は相當に学問もあり、殊に蘭学が出来たので、外国掛の方へ出仕して、ちよつと羽振りの好い方であつた。その妹のお道というのは、四年前に小石川西江戸川端の小幡伊織という旗本の屋敷へ縁付いて、お春という今年三つの娘まで儲けた。

すると、ある日のことであつた。そのお道がお春を連れて兄のところへ訪ねて来て、「もう小幡の屋敷にはいられませんから、暇を貰つて頂きとうございます。」と、突然に飛んだことを云い出して、兄の松村をおどろかした。兄はその仔細を聞き糺したが、お道は着い顔をしているばかりで

何も云わなかつた。

「云わないで済む訳のものでもない。その仔細をはつきりと云え。女が一旦他家へ嫁入りをした以上は、むやみに離縁なぞすべきものでも無し、されるべき筈のものでもない。唯だしぬけに暇を取つてくれでは判らない。その仔細をよく聞いた上で、兄にも成程と得心がまいったら、又掛合いのしようもあろう。仔細を云え。」

この場合、松村でなくても、先ずこう云うより外はなかつたが、お道は強情に仔細を明かさなかつた。もう一日もあの屋敷にはいられないから暇を貰つてくれと、今年二十一になる武家の女房がまるで駄々っ子のように、ただ同じことばかり繰返しているの、堪忍強い兄もしまいにはじれ出した。

「馬鹿、考えてもみろ、仔細も云わずに暇を貰いに行けると思ふか。また、先方でも承知すると思ふか。きのうや今日嫁に行ったのでは無し、もう足掛け四年にもなり、お春という子までもある。舅しゅうと、小姑ここの面倒があるでは無し、主人の小幡は正直で物柔かな人物。小身しょうしんながらも無事に上の御用も勤めている。なにが不足で暇を取りたいのか。」

叱つても論まをしても手応えがないので、松村も考えた。よもやとは思ふものの世間よにためしが無いでもない。小幡の屋敷には若い侍がいる。近所隣の屋敷にも次三男の道楽者がいくらも遊んでいる。妹も若い身空であるから、もしや何かの心得しん違ちがいでも仕出来しでかして、自分から身を退かなければならないような破滅に陥つたのではあるまいか。こう思うと、兄の詮議はいよいよ嚴重じゆうじゆうになった。どうしてもお前が仔細を明かさなければ、おれの方にも考えがある。これから小幡の屋敷へお前を連れて行って、主人の眼の前で何も彼も云わしてみせる。さあ一緒に来いと、襟髪を取らぬばかりにして妹を引立てようとした。

兄の権幕があまり激しいので、お道も流石さすがに途方に暮れたらしく、そんなら申しますと泣いて謝つた。それから彼女が泣きながら訴えるのを聞くと、松村は又驚かされた。

事件は今から七日前、娘のお春が三つの節句の雛を片附けた晩のことであった。お道の枕もとに散らし髪の若い女が真蒼な顔を出した。女は水でも浴びたように、頭から着物までびしょ濡れになっていた。その物腰は武家の奉公でもしたものらしく、行儀よく置に手をつけてお辞儀していた。女はなんにも云わなかった。また別に人を脅かすような挙動も見せなかった。ただ黙っておとなしく其処にうずくまっただけのことであったが、それが譬えようもないほどに物凄かった。お道はぞつとして思わず衾の袖にしがみ付くと、おそろしい夢は醒めた。

これと同時に、自分と添寝をしていたお春も同じく怖い夢にでもおそわれたらしく、急に火の付くように泣き出して、「ふみが来た。ふみが来た。」と続けて叫んだ。濡れた女は幼い娘の夢をも驚かしたらしい。お春が夢中に叫んだふみというのは、おそらく彼女の名であろうと想像された。

お道は慄えた心持で一夜を明かした。武家に育つて武家に縁付いた彼女は、夢のような幽霊話を人に語るのを恥じて、その夜の出来ごととは夫にも秘していたが、濡れた女は次の夜にも又その次の夜にも彼女の枕もとに真蒼な顔を出した。その度ごとに幼いお春も「ふみが来た」と同じく叫んだ。気の弱いお道はもう我慢が出来なくなったが、それでも夫に打ちあける勇氣はなかった。

こういうことが四晩もつづいたので、お道も不安と不眠とに疲れ果ててしまった。恥も遠慮も考えてはいられなくなったので、とうとう思い切つて夫に訴えると、小幡は笑っているばかりで取合わなかった。しかし濡れた女はその後もお道の枕辺を去らなかつた。お道がなんと云つても、夫は受付けて呉れなかつた。しまいには「武士の妻にもあるまじき」と云うような意味で機嫌を悪くした。

「いくら武士でも、自分の妻が苦しんでいるのを笑つて観ている法はあるまい。」

お道は夫の冷淡な態度を恨むようにもなつて来た。こうした苦しみがいつまでも続いたら、自分は遅かれ速かれ得体の知れない幽霊のために責め殺されてしまうかも知れない。もう斯うなつたら娘をかかえて一刻も早くこんな化物屋敷を逃げ出すよりほかはあるまいと、お道はもう夫のことも

自分のことも振返っている余裕がなくなった。

「そういう訳でございますから、あの屋敷にはどうしてもいられません。お察し下さい。」

思い出してもぞつとすると云うように、お道は此話をする間にも時々息を嚥のんで身をおのかせていた。そのおどおどしている眼の色がいかにも偽りを包んでいるようには見えないので、兄は考えさせられた。

「そんな事がまったくあるかしらん。」

どう考えてもそんなことが有りそうにも思われなかった。小幡が取合わないのも無理はないと思つた。松村も「馬鹿をいえ」と、頭から叱りつけてしまおうかとも思つたが、妹がこれほどに思い詰めているものを唯一概に叱って追いやるのも何だか可哀想のようでもあつた。殊に妹はこんなことを云うものの、この事件の底にはまだ他にほかになにかこみいった事情が潜ひそんでいないとも限らない。いずれにしても小幡に一度逢つた上で、よくその事情を確かめてみようと思つた。

「お前の片口ばかりでは判らん。ともかくも小幡に逢つて、先方の料簡を訊いてみよう、万事はおれに任しておけ。」

妹を自分の屋敷に残して置いて、松村は草履取一人を連れて、すぐに西江戸川端に向向いた。

二

小幡の屋敷へゆく途中でも松村は色々考えた。妹はいわゆる女子供のたぐいで固もより論にも及ばぬが、自分は男一匹、しかも大小をたばさむ身の上である。武士と武士との掛合かけあひに、真顔になつて幽霊の講釈でもあるまい。松村彦太郎、好い年をして馬鹿な奴だと、相手に腹を見られるのも残念である。なんとか巧い掛合かけあひの法はあるまいかと工夫を凝こらしたが、問題があまり単純であるだけに、横からも縦からも話の持つて行きようがなかつた。

西江戸川端の屋敷には主人の小幡伊織が居あわせて、すぐに座敷に通された。時候の挨拶などを